

「壁と存在」

芸術研究科 造形表現専攻
写真・映像領域 博士前期課程
2026年3月修了

竹藤 龍祐

主査 大日方 欣一 副査 百瀬 俊哉 佐藤 慈

研究背景

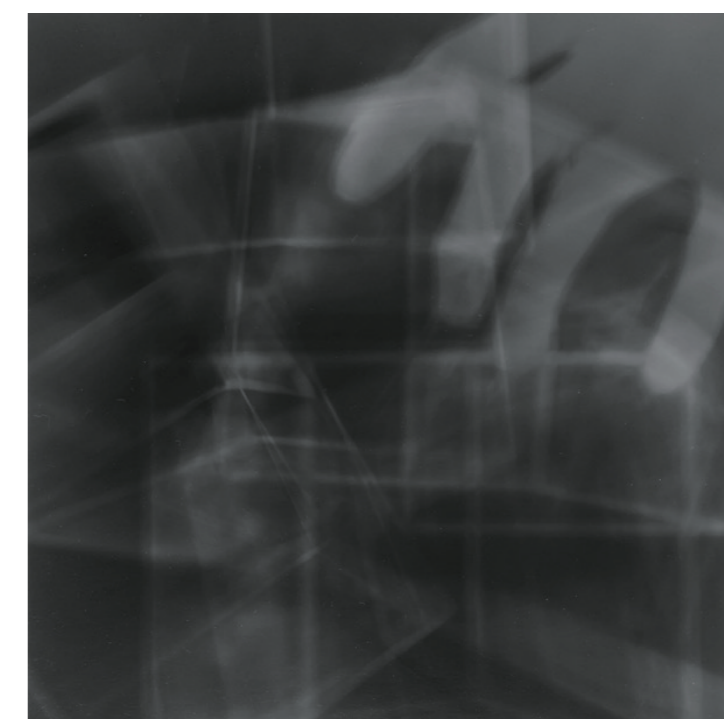
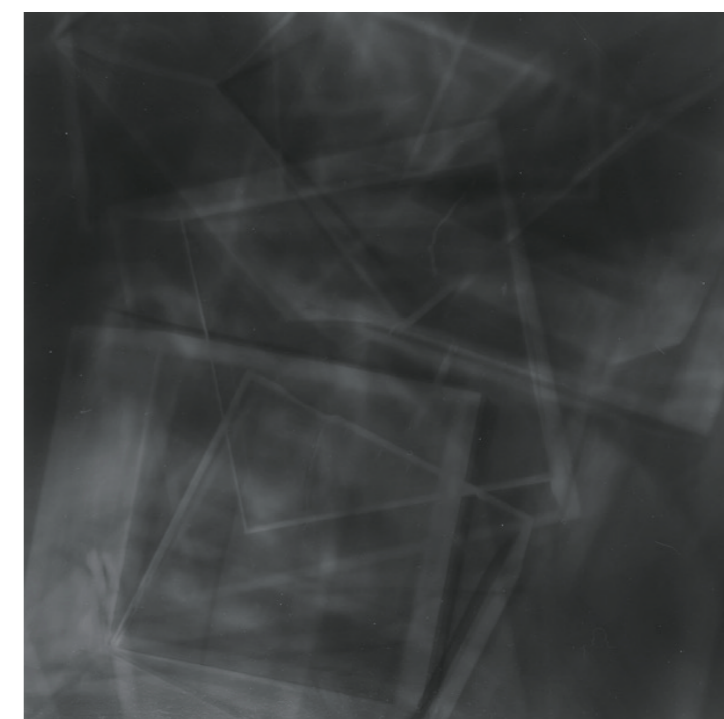
自分の存在は何なのか。自分はどのような人間なのか。私は一人きりで、壁そしてそこにある空間に直面することで自分という存在を素直に認識することができる。その際には、自分の存在と、そして世界と向き合っているような気がする。壁とその空間と突然出会い、対峙して写真を撮る。学部生の頃始めたスナップ写真を継続し、「壁」を軸にセルフポートレート、壁の集合体である立方体に焦点を当てた作品を展開してゆく。

研究方法・目的

私は、自分自身のことを知るためにスナップ写真を撮り続けている。その過程において、壁とその場所の空間に関心があることがわかってきた。また、複数のアーティストの壁に関する作品に触れ、自身の壁について考察した。壁を軸とした作品を制作するにあたって、新たに立方体に注目し作品を制作した。壁と向き合い撮影する中で、どのような壁も全て立方体で構成されていることを感覚的に理解したためである。加えて、家という区切られた壁の中にいる自分自身の体に直接カメラを向けセルフポートレートを撮影した。いずれも、自分自身のことについて理解を深めるための制作である。

研究概要

「兆し」(2025年)



成果・まとめ

写真を使い自分について知ろうとする過程で、壁に注目し、私にとっての壁とは何なのか考察し、作品を展開してきた。しかし、これからやるべき重大な課題を残している。それは、作品を制作する中で感じている「壁と、その壁以外の情報量が少ない空間には、人間の活動の痕跡の塊と世界そのものとのつながりを見ることができる」という事についてである。これについてまだ確実には言い切れない。私は、これからも「壁」と向き合い越えてゆく。



指導教員コメント

アナログ、モノクロームの方法を徹底し、身体技法化することをつうじ自己と世界の関わりを問い返すことを一貫して追求した作品。「壁」というキーワードを見出したことで、思考が深まり、アイデアが多方向に発火、スリリングな制作展開が導かれた。論文では、1920—30年代のシュルレアリスムや1970年前後のさまざまな芸術表現に自己のテーマとのつながりを探り、今後の制作への足掛かりとなる考察を繰り広げている。

大日方 欣一